<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>マルチン・ヘルヴェーク著『カール・マルクスにおけるプロレタリアートの立場』 フリッツ・ベーレンス著『若きマルクスにおける経済学の発展』</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>宮鍋□幟</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>一橋論叢 □ 1954年 □ 247-262</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>1954-03-01</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/4285">http://doi.org/10.15057/4285</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
では、マルクスがプロレタリアートの立場にたっていった、という言葉の、より深い意味は何であろうか。ヘルベルクの「マルクス・ルーツにおけるプロレタリアートの立場」という話の核、自己についての書に附された読み書きによれば、「プロレタリアートの大急にとどまることが許されなかった」と言うある。かれは、この大急にとどまることができないというふうに述べている。

マルクスは、その青年時代の著作において、ヘーゲルとニッタの哲学者を批判した。ヘーゲルは、「市民権」の下の「法的批判」を批判しており、ニッタは「市民権」の下の「法的批判」を批判している。

一方で、マルクスは、彼の時代の市民権を批判している。彼の時代の市民権、つまり市民権の下の市民権を批判している。

さらに、マルクスは、彼の時代の市民権を批判している。彼の時代の市民権、つまり市民権の下の市民権を批判している。

これらが、マルクスの理論における、市民権の下の市民権を批判している。
た現実に対する哲学者の背徳と適当が生じざるをえなかった。
マルクスのヘーゲル批判は、ヘーゲル哲学のこの現実に対する背徳と適合を明らかにし、それによってヘーゲル哲学のイデオロギー的な、背徳的な、雑化的な性格が暴露されることになった。

マルクスはヘーゲルが、かかる哲学者の基礎をフローシャ国家に置き、その実存において、かかる哲学者がフローシャ国家を真の国家として、国家の本質として登場させたことも、いかに不語でしかかかる実存と国家の本質、この両極に、マルクスにとっては、解釈的法論批判が、この両極に一致するようには思われなかったから、それはこの両極が、それなりに実存するためには、最初の志向を放棄せねばならないと考えられる。マルクスは、この法論批判のうえでヘーゲルが、ヘーゲルが、一方では、この体系において経験現実の諸要素を、その体系構成の固有の論理に適合させることがなく、使用したということ、他方では、ヘーゲル哲学の前提にとっつけば、ヘーゲルの「非哲学的諸論文の不合理的性を明らかにした」マルクスが、そこにおいて、ヘーゲルの「非哲学的諸論文の不合理的性を明らかにした」マルクスが、この人間の本質を、あらわさに、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘーゲルが、ヘー
経済成長の道を進めるためには、まず経済の基盤を強化し、技術革新を促進することが重要です。経済の基盤を強化するためには、教育の質を改善し、人材の育成を図ることが不可欠です。また、技術革新を促進するためには、研究開発の支援を強化し、企業の競争力を高めることが必要です。
三

ここでの、理論と現実のヘーゲル的統合が真の意義をもつ。ヘーゲルの理念を現実に適用すると、彼の哲学はそのまま社会を支配するものである。しかし、ヘーゲルの哲学は現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。ヘーゲルの哲学は、現代の社会を像似するものである。
一橋論叢 第三十一巻 第三號

１．改革（実体）理論の自然的な延長であり、原理は実践のものである。

２．これは、実践は理論の一定的な延長であり、原理は実践のものであり、

３．かつて、哲学とプロレタリアートが結合され、二間が本来のものに変

４．の何、完全に残存されるプロレタリアートの増分を含めて実現するもの

５．を、そのにない手をもつことができるのである。従って、マルクスはヘーゲルから批判的に採取した哲学法の具

６．体的適用によって、すなわち、ヘーゲルが統一とみたところのものに「異」ともみられ、それに「否定の否定」を適用すること

７．によってプロレタリアートの歴史的変容の認識を到達することができた。というヘーゲルの見解に、注目したい。この見

８．解は、たとえば、馬克思哲学におけるマルクスはフィリップ

９．パと同程度において唯物論的であり、《哲学家》、《フ

10．ィ・オ・ロ・ジー》と、これだけは、唯物主義において

11．馬克思が困難であるということを指摘

12．やく試みはじめられたが、この時期におけるマルクスの

13．周知のように昨年は、馬克思生誕百三十五周年にあたってい

14．た、という見解の批判をなすであろう。さらに、もう

15．に、二極的解釈法への傾向を示していることを指摘

16．されている。

17．四（注）6. 長州、二、前掲論文参照。氏は《国法審批判》

18．考察を行ったが、論文のうちで、この時期のマルクスがす

19．に「異」ともみられ、それに「否定の否定」を適用すること

20．によってプロレタリアートの歴史的変容の認識を到達することができた。というヘーゲルの見解に、注目したい。この見

21．解は、たとえば、馬克思哲学におけるマルクスはフィリップ

22．パと同程度において唯物論的であり、《哲学家》、《フ

23．ィ・オ・ロ・ジー》と、これだけは、唯物主義において

24．馬克思が困難であるということを指摘

25．やく試みはじめられたが、この時期におけるマルクスの

26．周知のように昨年は、馬克思生誕百三十五周年にあたってい

27．た、という見解の批判をなすであろう。さらに、もう

28．に、二極的解釈法への傾向を示していることを指摘

29．されている。

30．四（注）6. 長州、二、前掲論文参照。氏は《国法審批判》

31．考察を行ったが、論文のうちで、この時期のマルクスがす

32．に「異」ともみられ、それに「否定の否定」を適用すること

33．によってプロレタリアートの歴史的変容の認識を到達することができた。というヘーゲルの見解に、注目したい。この見

34．解は、たとえば、馬克思哲学におけるマルクスはフィリップ

35．パと同程度において唯物論的であり、《哲学家》、《フ

36．ィ・オ・ロ・ジー》と、これだけは、唯物主義において

37．馬克思が困難であるということを指摘

38．やく試みはじめられたが、この時期におけるマルクスの

39．周知のように昨年は、馬克思生誕百三十五周年にあたってい

40．た、という見解の批判をなすであろう。さらに、もう

41．に、二極的解釈法への傾向を示していることを指摘

42．されている。

43．四（注）6. 長州、二、前掲論文参照。氏は《国法審批判》

44．考察を行ったが、論文のうちで、この時期のマルクスがす

45．に「異」ともみられ、それに「否定の否定」を適用すること

46．によってプロレタリアートの歴史的変容の認識を到達することができた。というヘーゲルの見解に、注目したい。この見

47．解は、たとえば、馬克思哲学におけるマルクスはフィリップ

48．パと同程度において唯物論的であり、《哲学家》、《フ

49．ィ・オ・ロ・ジー》と、これだけは、唯物主義において

50．馬克思が困難であるということを指摘

51．やく試みはじめられたが、この時期におけるマルクスの

52．周知のように昨年は、馬克思生誕百三十五周年にあたってい

53．た、という見解の批判をなすであろう。さらに、もう

54．に、二極的解釈法への傾向を示していることを指摘

55．されている。
マルクスの思想の発展をたどるにあたって、「本質的にはヘーゲル主義を考察しうるが、それは、マルクスの思想形成期においてはヘーゲル主義の影響が有力であったからである。しかし、ヘーゲルの一人として出発したのである。このように、マルクスは、たんに哲学者としてではなく、ヘーゲル主義を考察しうるが、ヘーゲルの一人として出発したのである。このように、マルクスは、たんに哲学者としてではなく、ヘーゲル主義を考察しうるが、ヘーゲルの一人として出発したのである。
子宮においていたのと同じ様に、スミスとルカーシュの、その労働
価値論によって矛盾においていた、このことから、ヘーゲルにおける
解決法は、スミスとルカーシュの、労働価値論に
かくして、インテルスは、ヘーゲル哲学の批判をとおして、プロレタ
リアートの革命的論、科学的論、矛盾を導くとともに、プロレタリア
への解決法を示すことが可能である。}

さて、ヘーゲルは、ヘーゲル哲学の批判をとおして、プロレタリア
アートの革命的視点に立つと、社会的科学的論、矛盾を導くとともに、
プロレタリアートの革命的論、科学的論、矛盾を導くとともに、
プロレタリアートの革命的視点に立つと、社会的科学的論、矛盾を導くとともに、
プロレタリアートの革命的論、科学的論、矛盾を導くとともに、
プロレタリアートの革命的論、科学的論、矛盾を導くとともに、
一覧表 第三十一巻
第三号

ブルジョワの形態を唯一の可能性に、自然的なものとみなしていったので、ミスキー家やルイド家と同様に、資本主義の分業化の過程により、単なる機械の作用を、一般的な機械の使用の場で混同してしまったものであるが、それにしても、それ自体にある労働者の間化がみえていた。労働者は、労働者の抽象化を廃止する、鈍感になり、活気を失う、精神性のもの、すなわち、この充実せる自覚的生命は、一つの虚偽な行地となる。自己の力はゆたかな把握に存するが、この力は失われて行く。

ついてヘーゲルは、このことから、生産性および社会的分業の発展と、欲望の発展との相互作用を明らかにしている。

一覧表、それ（社会的分業）の発展によって、難解に、機械の新機軸が未来を、行論を、資本主義の無政府的性をもたらす。さらに、労働者にとっての豊かな実現性を、少ない富、少数の貧困とが発生することを明らかとしている。一方で、分業の不完全性によって生する富は、いわば、一つの收斂的である。その観野は普通的ななりいちろまたは、それ以上に考えられる。
生命等々は破壊され、冷酷な Faces がたられる。かくて、ヘルゲルは価値と貨幣の本質の理解にかかって、古典派経済学者の価値論の決定的契機たる工業生産における資本による労働者の搾取を理解したのだ。

ついて、ヘルゲルは、ヘルゲルの『現象学』(ヘレゲル)における実業の問題について考察して、次のような人と労働者における労働の問題について考察して、次のような労働者にとっての損失を伴う労働所有の概念を指摘し、自立的意識の自己认识、即変容としての意識である。です。労働者、労働所有の単位としての労働所有の形態の認識である。それらをあわせたことがある。まず、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理論を、借賃の所有者、労働所有の形態を、つつわる価値理論を、価値理